



俺はひねくれ者だ
世の中を見渡すと
嫌いなものばかりだ
ダイナマイトを体に巻きつけ
嫌いなものと一緒に心中してやろうかって
本気でそう思ったことがある

俺はとにかく好き嫌いが激しい
今現在 世界には六十何億かの人間がいるらしいが
俺の好きな人間は生きてるのも死んでるのも合わせて
せいぜい三百人ぐらいだ

今 俺は三十才だ
これまで世界中の人間を愛せたらいいなと思ってきた
努力してきた
でも努力じゃ愛しきれない
俺が好きな人間はいまだに三百人たらずだ

でもF 覚えておいてほしい
どんな馬鹿な奴の顔にも朝日は当たる
お前が本気で誰かを憎んでも
そいつにも必ず朝がやってくる

F
その朝日だけは憎むなよ
俺も
その朝日だけは憎まなかったんだからな

注1 Fとは友人の息子の名前ですが、個人名なのでイニシャルにしました。

注2 この詩は谷川俊太郎さんの詩『うつむく青年』に触発されて書くことが出来ました。『うつむく青年』はサンリオ発行の、同じタイトルの詩集に入っています。

二十代

オレを切なくさせるもの
それだけが たくさんあった
その切なさを埋める方法やモノは
たくさん売ってたけど
そして時にはオレも買ったけど
いつもハズレばかりだった

金 返せ

短歌二首

単純な ブ男なんて 呼ばないで
彼は本読む 我も本読む

なぜ言える 俺に魅力の あることが
おまえに女 こっちに青草（あおくさ）

黙っている理由

どうも口先だけで他人の興味を自分に向けてきたような気がする
だから君の前で黙っているオレは
ただのツマラン奴なのかもしれない

でもしゃべりまくると時はすぐ過ぎ去ってしまう
黙っていれば その時を味わえるような気がする
チャチな言葉で時をどこかに紛れ込ませたくない
そんな時
オレは黙ってる

そしてホントの言葉というものは
空気に触れるとすぐ死んでしまうので
ホントのことを伝えたい時ほど
オレは黙っていることもある

しゃべりまくってる奴だけがエネルギーを使ってるって？
必死な気持ちで黙ってることだってあるんだぜ

詩ではない

まず世間は詩ではない
色事も詩ではない
もちろん金も詩ではない
私のこれまでは
世界に詩を求めた三十二年間だった
でも何でもかんでもことごとく残酷に
詩ではなかった

モノを食うことは詩ではあり得ず
つまりは生きることが詩ではなかった
最終回の『ハクシヨン大魔王』みたいに
美しくは行かなかった
全ては

そして最近の私が詩だと思っているのが
新宿思い出横丁の
あの豚汁
あの豚汁の中にやっと見つかる
肉のかけら
あれが今の私には精一杯の詩で・・・
そう書いたら いやらしいことになるのかもしれないが

でも最近 私は分かったつもりなのだ
詩とは作るものではなく
見つけるものだというのを